

大学における課外活動としてのタンデム学習の実践

西坂 祥平(お茶の水女子大学)

1. はじめに

大学におけるキャンパスのグローバル化が求められる昨今、各大学では留学生および日本人学生を対象とした国際交流イベントが盛んに行われている。異文化に触れ、自己を相対化することに繋がる場合は、留学生と日本人学生の双方にとって貴重な学びの機会と言える。発表者は、2022 年秋から、勤務先の大学において、国際交流を活発化するため、タンデム学習プロジェクト《Ocha Tandem》を実施している。タンデム学習とは、母語/得意な言語が異なる二人がペアになり、互いの言語や文化を教え合う学習方法であり、学習者オートノミー(Learner Autonomy)と互恵性が重視される。例えば、中国語が母語の日本語学習者と、日本語が母語の中国語学習者が、1 回 1 時間のセッションの中で、それぞれ 30 分を中国語学習と日本語学習に充て、互いの学習を支援する。教師のいる教室での学習と異なり、自律的に学習を進める必要がある。

本プロジェクトは学期毎に実施しており、現在 3 期目を迎えている。これまでに、留学生と日本人学生が計 100 名ほど参加し、英語、中国語、韓国語、フランス語、スペイン語、タイ語、日本語などを学んでいる。タンデム学習のプロジェクト自体は、日本国内の大学においても広く実施されており、大阪大学や九州大学、山口大学での取り組みの報告などがある(脇坂ほか, 2021; 山本, 2013 など)。本分科会では、まず、発表者が実施しているタンデム学習プロジェクトの概要を報告する。そのあと、参加者の声をもとに、タンデム学習を通して、参加者の言語学習への意識がどのように変容したのかを探る。

2. タンデム学習プロジェクトの概要

Ocha Tandem は、大学の正規授業からは独立しており、所属の学部学科を問わない、完全な課外活動として実施されている。そのため、授業の成績に影響することもない。学期ごとの大まかな流れは次のとおりである。

まず、学期の前半に学内の留学生と日本人学生に呼びかけを行う。発表者が担当する留学生のクラスや学部の担当クラスでアナウンスをしたり、学内の他教員の協力を得て、交換留学生全体に周知したりする。また、学内の留学関係施設にもポスターを掲示する。募集の際、学習を希望する言語について、CEFR A2 程度のレベルであることを条件としている。参加希望者は、オンライン上で簡単なアンケートに答える形で参加申込を行う。ペアリングは、発表者が行っているが、申込情報を参考にしながら、できるかぎり関心が近いペアとなるよう心がけている。

学習を開始する前には、ガイダンスへの対面参加を義務付けており、そこでパートナーとの顔合わせ、プロジェクトの趣旨、タンデム学習を行っていく上での注意点、過去の参加者の声の紹介などを行う。そのあと、ペアごとにそれぞれの学習に 2~3 か月間取り組む。参加者の学習に教師は介入せず、学習内容や学習方法、学習計画は参加者がパートナーと相談しながら決定する。活動が進む中で、学習内容や学習方法、学習計画を変更することも自由である。これらの進め方も含め、プロジェクトをデザインする際には、青木(2016)などを参考にした。また、参加者にはオンラインチャットサービスの Slack への登録も求め、筆者が学習の様子などを尋ねられるようにしている。

学期終了時には、次学期のプロジェクトに生かすため、全員にアンケートに回答してもらっている。そこで報告された学習方法やコメントをもとに、ガイダンスの資料や募集要項の改訂を行っている。中には、その後も継続的にタンデム学習を行うペアや、次学期に再度申し込み、新たなパートナーとの学習に取り組む学生も見られる。

3. 調査資料と参加者の声

今回使用するデータは、2023 年秋学期にプロジェクトに参加した日本人学生のインタビュー資料である。ガイダンスの際に、調査への協力を依頼し、同意が得られた参加者に対して半構造化インタビューを行った。今回は、学習開始前に行ったインタビューと、学習開始から 1 か月程度で行ったインタビューの結果を分析対象とする。各回のインタビューの所要時間は 40~60 分程度であった。

質問内容は、過去の外国語学習への取り組み方、Ocha Tandem に参加した理由、自身の言語学習に取り組みたいこと、パートナーの学習への関わり方、自分の母語を教えることについて、外国語を学ぶ意義などである。

本発表では、英語学習を希望して応募した日本人学生のうち、1)英語母語話者ではないパートナーとの学習を通して、英語以外の言語へと関心を広げていった学生、2)多言語話者である留学生に接する中で、自身の母語である日本語を含む言語そのものや異文化への関心を強めていった学生に注目する。漠然と英語力向上を望んでいた日本人学生が、留学生とのタンデム学習を通して、言語学習に与える意味付けを変化させた例を紹介する。

参考文献

青木直子(2016)「タンデム学習－FAQ と経験知からの回答」『ことばと文字』6, pp.98-105.

山本冴里(2013)「山口大学多言語化プロジェクトの現状と課題:Language Exchange プログラム《Tandem》を中心に」『大学教育』10, pp.54-66.

脇坂真彩子・林貴哉・北川夏子・ヴォランスキ、バルトシュ・原田佳祐・蔡真彦(2020)「日本の大学におけるタンデム学習の意義」『JASAL Journal』1(1), pp.104-128.